

1923年 (大正12年) [19歳]

「辰雄日誌 1923」No. 2 (4)

—— 1923年7月1日～8月21日 ——

小池辰雄

○1923年7月1日 (日)

梅雨。The first day of July. とうとう7月が来た。午前は聖書と先生の書で。ヨハネ黙示録のみが残った。東京へ帰るまでには新約聖書を読み了えることが出来る。望みの通りである。この夏から、旧約と新約と並行して読むつもりである。この夏は本当に望ましい。多くの為すべきことを有っている。

第一に身体。第二に独逸語の勉強。第三に英語の勉強である。これよりも更に喜ばしき望がある。遥かに大なる望がある。その望みに日々を送って、初めて身体の鍛練も語学の勉強も生命を生じてくる。そのものが、自分の望むところのものである。

来れよ夏休みよ。豊かなるその御恵を受けなん。この夏、母様と暮らしたく思うこと切であるが、その叶いそうもないのは残念なことである。しかしなるべくおそばに居る様にしたいものである。

Every day is a fresh beginning,

〔毎日新鮮な始まり、

Every morn is the world made new.

毎朝は新しく造られた世界。

You who are weary of sorrow and sinning,

悲しみと罪に飽いた汝、

Here is a beautiful hope for you.

汝のために美しき希望あり。

I am glad that you make a daily new beginning,

わが欲びは、汝が日々新しく始めること。

there is no better means of progress in the spiritual 霊的進歩にとって大事なことは、

life than to be continually beginning afresh, and 新鮮な開始を持続すること、そして

never to think that we have done enough. 既に充分成したと決して思わぬこと。

—— As My Brother's Words.

—— わが兄上の言として ——

午後から独り散歩に出掛けた。細雨が降っていたので、傘を差しての散歩であった。横山の方へ行った。鉄道線路へ出た。千波沼のほとりは一帯に霞んで静かな平和なる景であった。木樹は清浄そのものの如くあった。道傍の草々までが、鮮やかな瑞々しい緑色を呈して、その快言わん方なしであった。孤影林間を行くときのその心地。別天地はここに在った。安息日の午後の賜であった。人々、試験のために齷齪^{あくせく}として勉強しているその厭な空気から飛び出て、林間に木と水に親しんで、只管^{ひたすら}、今日の御恵を受けたこと有難くあった。天の父との寂けき交わりは基督者に毎日必要なことである。世のものに染んで、失われんとする生ける霊は毎日、天から霊の糧を戴いて生きて行く。寂けき祈祷の何と喜ばしき感謝



なることよ。

夜、窪島様のお家へ蓄音器を聞かせて戴きに行つた。

夜にわたりこの安息日を心から「主の日」として送らず、勉強をしたい気の少々生じたのは誠に赦し給はんことを祈らざるべからざることであつた。試験が5日から始まる。高等学校へ入って最初の試験であるので小々心にかかる所為もあるから。しかししかし。

安息日を聖守せられし兄に倣つて僕も亦である。律法に縛られてに非ず。我が霊、ゆるさざるが故に勉強をせずである。勉強すべき日に非ざるが故に、勉強には非ずである。

12時を報ぜんか、自分は猛烈な勢いで働きのとりかかろう。勉強にかかろう。それまでは、聖なるが故に、安らかに休むべきである。兄上よ、守れかし。

○1923年7月2日 (月)

スピカよ、アンタレスよ、リラよ、ヴェガよ、白鳥よ、カシオペアよ、親しき我が易らざる友よ。今夜、勉強に勞れしときに、汝等の顔を仰ぎ瞻て我が心癒されたり。我が霊、潤えり。試験は近づけり。しかし試験は何だ。一時のうたかたにすぎぬ。5日間で過ぎ去る。何をさわぐか、人々よ。汝等に、この月とこの星を友とする心なきや。

We need only obey. There is guidance for each of us, and by lawly we shall hear the right word.

○1923年7月3日 (火)

曇。一日、試験勉強をした。聖書を読む時間の遅れ、且つ少なかったことは遺憾であつた。寝たのは12時を過ぎて居た。

○1923年7月4日 (水)

晴。今日は授業はなかった。夏晴の快き天気であつた。水衣を着た。相変わらず試験勉強である。胃は、よくなつたり悪くなつたりである。総てが己れの信仰、不信仰から来る。これから間食は絶対と言つてよい位に廃することにする。健康な人々が、紅茶を出し、お菓子を開いて食べていると、自分もお腹の具合の悪くないときは仲間入りをする。別に悪い程のこともないであろうが、食わざるは食うに勝れりで、お菓子の類はお腹を益することは無いから、廃するに如かずである。もつと健全、頑強な身体となつてから食べるがよい。不徹底なことは何をするにもよくない。旗幟鮮明な、徹底した人間になろう。人を相手に彼等の顔色を見つつ世を渡る卑劣漢は最も恥すべきである。

今日、母上様から有難き御手紙を戴いた。



○1923年7月5日 (木)

雨、蒸す。この頃の気候不順、雨が降ったり、蒸したり、曇ったり、風が吹いたり、実際、非健康的である。今日は最初の試験の日であった。高等学校入学試験以来、久しぶりで試験なるものを受けた。高等学校に於ける最初の試験。第一に数学、劈頭に1題失敗して残念だった。赤○がひよつとしたら着く。何と云つても、あれだけ勉強したのに癪である。次の歴史、これは思う存分書き述べてやった。英語、これも意のままに。応用問題の未知の字、その想像が当たったので愉快だった。難関の日が過ぎて、生々した。

○1923年7月6日 (金)

雨。沛然として梅雨気候。勉強で油をしぼられ、その上、運動不足であるから、身体は頓に消耗して、顔色やや蒼然たるを免れない。しかし、意気のみは天を衝くの概ありである。今日も相当がんばった、一時頃まで。

今日の試験は漢文、地理、修身であった。漢文は、山と思つたところ出で、すいすいであった。論語の方は、目を一回通しただけであったが、中学でやったり、受験のときにやりしたお蔭で、苦もなく解せられた。地理は難問、これは総括力を要した。なかなか骨であった。地理といつても、亀井先生のは政治と外交と歴史とを混淆した様な頗る妙なものである。主として欧州列国間のこと。返つてこんな地理の方が僕には面白い。修身は平凡。大してよくも書けなかった。

○1923年7月7日 (土)

曇。連日の睡眠不足で、消耗はその絶頂に達した。そのため、今日は何も為なかった。四郎君も宣彦君も同じく消耗していた。就寝9時。窪島様が晚餐のお饗をして下さった。親切な方である。

○1923年7月8日 (日)

曇、風。起床9時。聖書を二、三章読んだ。今日は午後から勉強した。已むを得なかった。僕の普段の不勉強がかかることを産むに至った。安息日聖守は今日、ついにやぶってしまった。誠に残念であった。しかし、自分の心が神をはなれたのでなかったのであるから、神様は赦して下さいと信ずる。来学期は試験中でも、かかることなき様にしたいものである。明日の独逸語の試験は難物であるため、どうも已むを得なかった。

○1923年7月9日 (月)

雨。難物の独逸語の試験。幸なる哉。自分は一時間少しで解答を書き得た。僕より一人先に出した豪者が居た。僕はその後すぐ出した。しかし、そこに虚栄の心の一点にてもあ



りしを思い、僕は後、己れの心に責められた。僕自身の快とすることでもなかったし、兄上これを見て、よしとせられなかったと思い、深く赦しを祈り奉った。とにかく、好結果であつたらしく嬉しかった。天文学の方は僕のすきなもの、思う存分書いて来た。

あと一日で試験が終る。夕飯までひる寝をしたり、荷造をしたり、心はなんとなくはれやかになった。帰省の念が勃勃としていたからである。母上は待つて居られる。

○1923年7月10日 (火)

曇、夕雨。自然科学の試験。すらすらと出来た。有終の美をなし得た。12時の汽車で帰京の途についた。去年、常磐病院に臥してこの日、帰られざりしを想起して、今日の有難さ、沁み沁みと懷中にある。帰宅するころ、雨に降られた。それから、10時頃まで静かな雨が降っていた。

○1923年7月11日 (水)

晴。午前、製菓会社へバスケットを買いに行った。午後、山本へ遊びに行った。義雄さん、隆さん、富美ちゃん、なかなかよく喧嘩をする、食べる、寝る。活動は盛んである。

○1923年7月12日 (木)

曇。お寺へお中元に行く。笹がよく茂っている。慕わしげのあるお墓、賑やかなお墓であると感じた。お父さんに、兄さんに、愛ちゃん、それに先祖代々。兄上様の墓前に立つときは、どうしても涙をそえられる。

兄上の霊と僕の魂と相通ずるものあるを感じて、しかし、何より力強きものがある。蝶がどこからともなくひらひらと舞つて来て、手向けの花に飛びついた。

○1923年7月13日 (金)

曇。夏の様でない、涼しくて。夜は未だ蚊帳が要らない。7月の半と云えば夏の最中であるのに、夏らしい感じがしないのは近年稀なことである。

夜、武田の家へ行った。雨が降っている。塀が立派に出来た。門も玄関も見違える位、立派である。立派！何を意味するだろう。しかしこのため、……………。あとは書くに及ばぬ。叔父様の為れることをかれこれ批評したくはないが、ただ日本人の小なることと、その大なる欠点を見せられて痛嘆せざるを得なかった。武田の叔母様が居られて、武田の家はもつ。四郎ちゃんが来ていた。皆様で蓄音機に耳を傾けて居られた。

○1923年7月14日 (土)

曇、雨交々。運動不足なので青木まで徒歩で行く。同心町の旧家の側を通った。懐かし



い懐かしい情にかられて涙が零れそうだった。何と云う人が住んでいるかと、一寸立ち寄って見ようと思ったが、そのまま通り過ぎた。佐野さんに立ち寄った。夏のことです。

○1923年7月15日 (日)

晴、曇、雨。近頃の天候の悪いこと、実に困ったものである。ものは錆びる、人の気は腐る、食欲は進まぬ、疫病が流行りだす。総てに影響を齎らす。氷屋も不景気である。総てに活気がない。一般の有様はこんなである。ただ机に向かっているときのみ別天地である。自分の心、書と共に語るときのは、我はこの世のものに非ずである。今日は亡兄の第29回御誕生日である。おはぎを沢山戴いた。久しぶり非常に美味しかった。母上様のお手づからのであった。四郎ちゃん、宣ちゃんが来られた。

○1923年7月16日 (月)

雨、曇。36年ぶりの霖雨であるとのこと。2ヶ月余りにわたって天候は梅雨期である。非健康的である。7月のと云えば、常のことなら、暑い暑いと云うのに、今日は蒸す蒸すとか、じめじめするとか、厭な気分を示す語が交わされるばかりである。今日は久しぶりで1年余で、活動写真を観に行った。喜劇ばかりのニコニコ大会である。随分、愉快であった。笑った。誰か一緒に見に行った人が居たら、更に面白かったことであろう。一人で活動を見に行ったのは初めてである。喜劇だから見る気も出た。普通の劇であつたら、くだらなくて見ては居られなかつたろう。喜劇でも、これでまた当分は沢山である。見る気はなれまい。浅草あたりの雰囲気は最も自分の厭むところであるから、また一つには、やつぱりその浮薄なところが僕には適さないからである。喜劇なんか見て来て、その声色、挙動をまねたりする奴を見ると厭になる。その人々はいつのまにかその上調子に感染するのである。

母上様、2、3日前から上体にブツブツが出来て、痒ゆがつて居られる。それは蟻の一種の有害な奴の卵や鱗粉が皮膚に(洗濯物から)触れたからであるとのこと。牛込に相当流行していることである。姉上様が軽い肋膜炎で病臥された。姉上様のも大したものではないから、今の中に徹底的に根から癒してしまえばよい。晩、青木へ行く。実さんの高文試験準備、大変である。兄上のときが偲ばれた。

○1923年7月17日 (火)

雨。午前9時、出掛けた。吉原へ行つた。雨で傘を持って行かねばならなかった。荷物も相当であつた。独逸語のエソップを読んでる中にすぐ行ってしまった。独逸語は読むに骨が折れるから時間の経つのが速い。

「ゴメンクダサイ」と云った。貞ちゃんがその一声で奥の方から察して「ヨクオイデクダサイマシタ」と快々たる声で言われた。間もなく叔母様も吉彌様も、礼ちゃんも一家で嬉

しげに迎えて下さった。

吉彌様の足が予想外にお宜しいので安心した。お昼は蝦の御馳走になった。お見舞のお客様が大部分来られた。僕は午睡を少しやった。相変わらずの胃で精力消耗していて、折角行ってもあまり食べられなくてお気の毒であった。自分も甚だ残念に思った。

僕の胃は、氣候の具合と、この間の試験勉強のためもあるが、自分に罪の大部分がある。総てが自分の罪による。時々、己れのあまりのだらしなさに泣きたくなる。夜は、吉彌さん、貞ちゃんと三人でランプをやった。愉快であった。礼ちゃんがよく喋舌^{しゃべ}れるようになってるので驚いた。近頃の子供は頭の發育が速やかである。10時就床。

○1923年7月18日 (水)

曇、陰雲鎖す。昨晩帰ろうと思ったが、雨が降っていたのと、おとめになるのとお宿りをした。今朝は貞ちゃんが、僕が馬鈴薯が好きだからと云つて態々^{わざわざ}と置いて下さった。お薯^{いも}でお汁をつくつて下さった。そのお心に感謝した。午前10時、お暇^{いとま}した。

母上は失明の御身で居られる。姉上は病臥して居られる。孝さんは気がつかない。僕は如何にせんである。かかる一家にある自分は何としても身体健全であらねばならぬ。働かねばならぬ。現在の自分では、つとまらない。この夏には身体を健全にせんためには全力を尽くそう。

夜、お使いに行く。同心町まで。昔馴染みの下駄屋に寄つて、板草履を買った。お上さん、よく覚えて居てくれて、母や姉のことを尋ねてくれた。やつぱり昔のことが思われて嬉しく思われた。例の通いにしていた氷屋はその繁盛の後がよく見えて、前より立派になっていた。帚屋^{ほうき}でも、あまり久しぶりで僕が顔を見せたので驚いていた。皆、にこにこした顔と驚異の顔のコンビネーションで僕を見ていた。

神楽坂まで歩いて来た。徳川邸の横の坂道、それから江戸川へ出る道、これらは皆、懐かしき思い出の土であった。丁度、スコルピオ〔サソリ座〕が南天に懸かっていた。本当に久しぶりで星々が輝いていた。空を仰いでどうして兄上を想い出さずには居られなかったであろうか。神楽坂で買い物ですませて帰つて来たのは10時であった。

○1923年7月19日 (木)

晴。星づく夜に希望に満ちて就寝した。果たして今朝は輝きの暉日が歓びの光を投げていた。我がことは、我が心と我が身体のみ。それが総ての善をなす基である。我が心、乱れたる此の頃、我が死せるこの心、我が迷えるこの心。総てを忘れ、総てを棄てて。総ては空のみ。この世は旅路、かりの宿りなり。ただ神にのみ、よりのまん。彼の、

「人はパンのみにて生くる者にあらず、エホバの口より出る言による」と云い、また、



「父なる神が食物を賜うまで、父なる神の仕事が成し遂げられるまでは食せぬ」
と宣給^{のたま}いし御方のその聖き断食は、飲食に於ける聖き節制を教えて下さる。枕する処をさえ有^もち給わざりし彼の聖き貧乏は、地上の物質を所有^もち之を私用^{のたし}い享樂^もむことに於て節度あるべきことを教え給う。確固たる信仰の生活をなさしめ給え。

○1923年7月20日 (金)

晴、曇、雨。姉上、肋膜炎で病臥して居られる。母上は御不自由の御身。僕は働かねばならなくなつた。僕が避暑に行くとは本当にあとが困る。お孝さん一人では到底、手が廻り兼ねる。僕が健全な身体なら、残つて家のお手伝をするのであるが、僕も胃が弱っているから、これを全治せしめなければならぬのである。そこで、何人にかお手使いに來てもらわねばならない。

僕は杵掛^{くっかけ}〔現在の中軽井沢〕へ行かせて戴く。そして、いつでもお役に立つ身体となつて歸つて來なければならぬ。今は身体の健全を最大の要務とする。而して真心を以て総てをなす、これが僕の道である。多くの希望を托せしこの貴き休暇の始めの10日がかくの如く神を離れて過ぎ行きしを誠に悲しく思う。自分はお使いあるきはよくした。家の中でもよく働いた。しかし、真心と謙遜と親切とに欠けては居なかつたかしら。

聖書を読む、宗教書を読む、讚美歌を歌う。是誠に大事なことである。しかし、その心の生活、その実行の生活がなくて、どうして基督者たり得るだらう。

今晚は神に熱き祈りを捧げるのである。そしてお父様は僕を棄て給わず、助け給え。一層、強きしつかりした道を踏ましめ給うことと信ずる。明朝は朝日と共に歡喜と希望の道を歩ましめ給うらん。

「よわきものよ われにすべて

まかせよやと 主はのたまふ

主によりて あがなはる

わが身のさちは みな主にあり。」(170 [現514])

「まづこゝろもて あふぎまつらん

のろひの 木にかかりて しにたまひし

すくひのぬし わが主よ」(213 [現268])

「わがこひしきエスキみの みこえぞうれしき

わがのぞみわがいのちは きみにこそあれや」(246)

眼はただ十字架をのみ。心はただ主にのみ。

夜の驟雨^{しゅうう}は僕のために潜然と降つてくれた。罪の結晶なる僕のために悲しんでくれた。而もこの暗澹^{あんたん}たる僕の道さえ、主は光明の道を示し給う。その有難さよ。感謝なることよ。アーメン。



母上よ忍び給え。僕の不敬不孝を赦されよ。姉上よ、足らざる僕の心と看護を赦されよ。孝さん、僕のつまらなき怒、小言の数々を赦されよ。

総ては僕の罪であった。総ては、主に従え奉る心の欠けていた僕の穢きより起った。これらの総ての罪、主は贖い給うた。主におすがりして僕は再び生きた。

喜びの日は明朝と共に来る。感謝の晩、歡喜の朝。総て主によりて。

兄上よ、兄上よ、北京の兄上よ、僕も兄上の如く。僕の唯一の友なる兄上よ、兄上が僕に宿れば、僕は何も要りません。兄上と共に主の僕となつて仕えまつりましょう。主よ、どこまでも、望と信と愛とを以て踏^{あゆ}ませ給え。アーメン。

○1923年7月21日 (土)

晴。暑い暑い夏の一日であった。今日もまた看護とお使いであった。星の光のみが慰安の友であった。久しぶりで唱歌を唱つて自ら慰めた。

My Jesus, as Thou wilt

All shall be well for me;

Each changing future scene

I gladly trust with Thee.

Straight to Thy rest above

I travel calmly on,

And sing, in life or death,

My Lord, Thy will be done!

〔註：“My Jesus as Thou wilt.” (讚美歌 285 「主よみてもて」) の第4節。直訳〕

わがイエスよ、あなたの御意がなるように！

すべてが私にとって益となるでしょう。

未来がどのように変わっても、

私はあなたに喜んでまかせます。

天のあなたの家に向かつて、

私は静かに旅をし、

生にあつても死にあつても歌います、

わが主よ、あなたは成し遂げられます！と。

○1923年7月22日 (日)

兄上の御命日〔9月22日〕。相変わらず暑い日。今日から旧約聖書を読み始めた。



○1923年7月23日 (月)

夜、斎藤力様(附属の大先輩)が僕を、暑いからと云って呼んで下さった。お二階へ上った。気持のよいお室である。一家は至極、睦まじくある。キクという女中も上つて来て、納涼である。レン子さんという五つになる女の御子は本当に自然な、無邪気な愛らしい子供である。彼女は斎藤さんの御夫婦と、その未だ三つの時から非常に慕ってなついたので、斎藤さんでは、その小児の純潔なる愛にひかれて、おもらいになったとのことである。今晚伺ったことではないが。

また、精巧な独逸の玩具があつた、汽車の。独逸の工業物のかくも行き届いて小児に面白く、あぶなくない様に出来ているのを見ては全く驚き且つ称賛せざるを得ぬ。快談2時間、十分の納涼をなし、即製ソーダ水をいただき、帰宅した。斎藤さんは、平つたい親切な方である。運動を大いに好まれる。ボートのトテモよい写真があつた。英米の印刷物の優秀なものには感嘆した。

奥様も勿論、親切この上なしで、母や家のためには随分、御助力や便宜をはかつて下さる。このお家があつて、僕の家、母の不自由な身で居られる家は、お蔭を蒙っていること甚大である。

人のためにすることの如何によきことであるかを見て、斎藤様の御幸福を羨む位である。人は、人のためにしてますます幸福である。人は人に施されてますます一種のくるしみを感ずる。

母上はしかし、その働いて居られた間に、人に施せし人であつたから、今、御自分からはから施されて、つらくお感じになるかもしれないが、前になした報いとも云うべきものであるから、人から受けて幸である。しかし母上はこれでは満足せられず、御不自由の身でありながら、常に対等ならんことを努めて居られる。

○1923年7月24日 (火)

曇。朝、霧雨が降っていた。しかし今日は杳掛へ行く日である。僕の心は希望に満ちて、雨なんかなんでもない。7時少しすぎ家を出た。出る前、母上が僕のために祈禱を捧げて下さった。涙であつた。僕は母上のお心を有難く戴いて、かたき決心を抱いて出掛けた。

「健康体に、そして神のために、主によって」

ただこれだけが僕の願いであつた。僕の一生は、神のために主によりて、これだけのために捧げらるべきなのである。その御用をなすためには、戴いたこの身体、愛する我が母上から——母上を通して——戴いたこの身体を損なうことなく健全にしなければならぬのである。そのためにこの夏休は来た。杳掛行、避暑は与えられた。感謝して受け、十分それをして効果あらしめねばならないのである。総て感謝である。どうしてこれを御恵と云わずに居れようか。佐野大介様の御親切にもまた深く感謝するのである。



病床の姉と、御不自由の母上とを暑い東京に置いて出掛けるのは、涙である。しかし、母上は僕の胃腸のために、温泉行を勧めてくださった。幸に看護の人が今日から来たので、僕の手があいた。それで出発ということになったのであった。

僕の身体はますます貴きものとなった。重大なものとなった。兄上の身体もまた然りである。8時50分発、四郎ちゃんと二人。車中は立っている人少なく、空は曇であるから夏の汽車としては楽な方であった。高崎までは相当暑く、アイスクリームを二杯とって、^{うるお}を霑した。高崎から先は昇りで、段々涼しくなってきた。横川へ来て、電気機関車となつてからは、煙がないので気持ちよく、山の間であるから断然涼しくなってきた。碓氷峠は多くの懐かしき思い出を提供した。愛らしき撫子が谷間に笑っていた。涼しい雪がトンネルから垂っていた。26の墜道を縫って軽井沢へ出た。涼風颯然として窓外より流れ込んで来た。爽快言わんかたなしである。別天地へ出て来たのだ。沓掛まで汽車はその傾斜道を球の如く転げ下つて来た。6時間は、僕等を暑い東京から涼しい沓掛へ運んでくれた。時に、停車中の上り列車中に、伊藤先生の居られるのを偶然にも発見した。こっちも先生も驚いた。意外のあまり、数語を発して交わすばかり。あとは、何を言つてよいのか。その中に発車となる。徒歩で北佐久郡東長倉村、沓掛星野温泉、蔵尾別荘なる佐野様のお家まで行つた。白聖の壁が小丘の腹に立つて如何にも涼しげである。その清水を一掬したときの感じ、実に素敵！と云うばかりであった。清冽、見ても呑んで触れても快たるのみである。手の切れそうな水とはこれである。頭をつけては頭も切れそうである。温泉もその効を見ざる前より^{ききめ}効果が有りそうに感ぜられて心地よかつた。

果たせる哉、夕飯から頓に食欲増進した。夕食後の散歩、それは実に幸福なる時の一つであつた。浅間の姿、淡くなり行く夕焼。山に纏^{まと}う^{あいた}靄^もたる雲、冴え行く月光、増し行く星影、銀光を運び行く草木、流水、人影なき道に寂しく光る電燈、而して是等総てにみづる清浄なる大気。なんたる寂けき平和なる夕ぞ。自然よ、自然の美しさよ。

その朝とその夕の何たる差異ぞ。対称ぞ。己れの幸福、^{おも}懐いの如何に切なる。神に祈り、感謝し、讃美するのみ。総ては善のみ、聖旨のみ。希望の夏休の第一日はかくして暮れ行く。

○1923年7月25日 (水)

晴。昨夜の涼しかったこと、戸を鎖して、蒲団と毛布とをかけて寝て丁度よい。今朝、起床6時、眼は心地よくも開いた。朝食2杯、食欲の出たのが本当に嬉しく愉快である。午前はチョット散歩に行つて、キャッチボールをした。

午後、千ヶ瀧の方へ散歩に行つて、一高の野球の練習ブリを見た。大理石の浴場へ入つて来た。温泉も効くが、気候がよいから頭脳には好適である。あたまがかるくなる。

ホテルの光が黒い森の影にちらちらと明滅する。月がそろそろ盈ちて来た。終日終夜、夏しらずの心地。何たる幸福ぞ。東京のことを思うと我ながらこの身の樂すぎるのを感じ

ざるを得なくなる。しかし折角戴いたこの休暇、この好き地、これをして十分効あらしめねばならぬ。勉強はほとんどしなかった。就寝10時。

○1923年7月26日 (木)

晴。起床6時。朝食7時。雑巾掛、室掃除、庭掃き、等。8時半頃から少々勉強。千ヶ瀧散歩。キャッチボール、入浴。正午、昼食3杯。午睡。少々勉強。書翰。お茶菓子。それから僕は沓掛駅の側まで行つて、自転車借りて坂を7、8町上つて下った。その快たる言わん方なし。それより軽井沢まで約1里の道を遠乗り、これまた快。1時間あまりにわたるよい運動をして来た。入浴。夕飯3杯、未だ4杯とは行かぬ。昔の勢は未だ出ない。温泉では無理かも知れない。海へ行けば素敵にお腹がすくだろう。

一日、涼しい涼しいと言っている。東京の人は避暑がつているだろう。今年はこれから酷暑に入るそうである。一時に高温に昇るからたまらないだろう。新聞によれば、東京はそろそろ「華氏」90度「摂氏約32.2℃」を突破しだすとのこと。当地は昼でも80度「約26.7℃」内外、昇ったところで85度「約29.4℃」は越すまいとのこと。朝は、70度「約26.1℃」内外である。

○1923年7月27日 (金)

晴。起床、6時半。午前、家に居る。午後、政矣さんと池に泳ぎに行く。浅い。泥が浮いてくる。あまり泳ぎ心地はよくない。しかし泳ぐそのことだけは出来るので満足した。2年ぶりで泳いだわけである。

○1923年7月28日 (土)

晴、満月。午前6時半起床。政矣さんが帰京された。見送りを兼ねて自転車乗りをする。軽井沢まで行く。往復50分。よい運動。照りに照っていたので随分暑かった。入浴後、昼食。夕方、キャッチボール。入浴。すっかり草臥^{くたび}れて、9時就寝。十五夜。

○1923年7月29日 (日)

晴、十六夜。午前5時40分起床。旧約聖書、創世記を読んだ。

William Hopden Hutton の“A Disciple's Religion”を読んだ。

I Simplicity [純真]、コリント後書II・3、エペソ5・5。……[英文省略]……

「されど我が恐るるは、蛇の悪巧によりてえバの惑されし如く、汝らの心害はれてキリストに対する真心と貞操とを失はん事なり。」(コリント後II・3)

「僕たる者よ、キリストに従うごとく恐れおののき、真心をもて肉につける主人に従え。」(エペソ5・5)



II Patience [忍耐]、…… [英文省略] ……

「忍耐をして全き活動をなさしめよ。これ汝らが全くかつ備りて、缺くる所なからん爲なり。」(ヤコブ1・4)

サーモンの第一、第二は、単純と忍耐とであつた。この本は1月13日に教文館で購入したものである。良き書であつて買ったかいがあり嬉しい。今まで本箱に蔵してあつた。この夏に読みあげたい。

午後、佐野様と四郎君と三人で散歩に行つた。観翠楼の辺まで昇つた。グリーンホテルにはここからも相当あるので行くことを止めた。帰つて来て僕は池で遊泳を一寸した。お爺さんは御飯を焚くのが実に上手である。感心した。お蔭で一段と食事が美味しい。夕食後、入浴した。今日は十六夜の月、昨夜に劣らぬ明月である。蠍が南天にその全身を横たえていた。カシオペアがほぼ平らにそのW字を浮かせていた。白鳥が山から飛び立つた様な姿をしてキラキラと飛んでいた。今日は日中は88度(約31.1℃)に垂んとしていたが、涼風のため暑いとも思わない。誠に有難い。夕方からはずんずんと低下して行き、夜は75度(約23.9℃)辺まで下つた。山間であるから霧も頭上近くに下りてくるので、すっかり涼しくなつてしまふ。お爺さんが例の如く一杯機嫌で愉快気に喋舌^{しゃべ}る。罪のないものである。

○1923年7月30日(月)

晴、夕立。明治天皇祭。去年の今日は水戸から退院して東京に帰つた日である。丁度、1年になる。過ぎ去つて見ると総てが「速」の字一字で尽きる。その間の経過を考えて見ると、涙がある。遺憾がある。困^{くる}しみがあつた。しかし、何よりも勝る喜びがある。それは僕の「赤兒」となつたことである。エス様の赤兒となつてこの世に出でたことであつた。僕の胃腸は1年後の今日も未だ健全の域に達して居ない。僕の信仰の薄いため、罪の塊たるこの身のため未だに、その目的を達しないことは誠に遺憾とするけれども、エス様によつて救われることの確かなるを信ずる瞬間瞬間は新しき生命を注ぎ込んでくれ、僕は希望に、この弱き身体を有ちながら生きて行くことが出来る。そのみが生命である。これによつてあるときは健康体の人よりも強い。彼以上のことをなし得ることもある。

政矣さんが再び杳掛へ来られて賑やかになつた。散歩の帰り、気持ちのよい夕立に遭つた。男性的な襲来は、濡れても気持ちがよい。入浴後、ピンポンをした。大分上達した。10時消灯。主よ、吾等は只爾^{ただなんじ}と偕なる時にのみ爾の如くあり得る也。

吾等は只爾に居る時にのみ爾の如く行い得るなり。

爾深き主よ、吾等は只爾に居らん為に己を棄つ。

良く爾に献ぐる生命のみ爾は之を所有し給う。

吾等に居る爾の聖霊をして爾と密接に吾等を一致せしめ、

常に世の属^{もの}ならぬ者として生かしめ給え。アーメン。(基督の如く)



○1923年7月31日 (火)

晴。朝から気持のよい霽^{はれ}であつた。8時半、政矣さん、四郎ちゃん、僕の三人は散歩に出掛けた。浅間路を沓掛駅近くまで下つて、左に折れて軽井沢へ通ずる国道を鉄道線路に並行して歩み、それから離山登山にかかった。軽井沢は一望の中にある。殆ど一気呵成に登つた。山頂へ着いたときは流石^{さすが}に喘^{あえ}いでいた。流汗もかなりであつた。しかし、涼風はやがてそれを癒してくれた。約1時間、実に爽快な気分を味わつて十分の休息をなし得た。日本アルプスの連山がかなたの雲外^{しようりゅう}に聳立^{しょうりゅう}していた。槍ヶ岳^{さんぜん}は嶄然^{さんぜん}、その雄峰を現わしていた。避暑人のための軽井沢は、箱庭の如く俯瞰^{ふかん}される。家といい、池といい、樹木の列といい、庭といい、グラウンドといい、それ人工のものは何れも此の如き山上より臨み瞰^みれば、箱庭同然である。汽車は毛虫かと思われ、川は流ることなく、アブラ画の如く見える。浅間山は北方に厳然として坐っている。下山は之、一気。忽ちの中に、径路を下つて新軽井駅^{しんけいせい}の上部に出る。ゴルフの遊びに興ずる上流の連中が居る。

清流に出て、これを掬^くして蘇生の思いがあつた。ゴワゴワになつていた口もやつと人の口らしくなつた。それより軽井沢町へ出で、テニスコートを一寸のぞいた。2、3の友に遭つた。スパックマンという中学5年のときに習つた英人(婦人)が居られた。声をかけようと思つたが先生の僕を知っているとは殆ど全く信ぜられず、また僕の何者たるかを話すも容易ならぬ英語の会話の力。また一つには2、3の外人が先生と共に歩いていたし、到底、声は僕の咽喉^{のど}から出なくなつてしまった。

丁度、お午だったので洋食店に入つて、軽いランチを認^{した}めた。アイスクリーム・ソーダは一昨年の思い出であつた。一昨年ここでコレヲ飲んだことがあるのである。軽井沢で帰途、井本に遇う。

2時半の下り列車で沓掛へ帰る。夕方入浴。よい遠足だったので夕飯は美味しく戴けた。夕食後休息、入浴。奇麗な星。涼しい晩。たかる虫、草臥れた足を長くしたのは10時であつた。

○1923年8月1日 (水)

晴。起床6時半。朝食7時半。8時半頃から勉強。キャッチボール20分。河野が丁度通りかかった。立ち話を一寸した。彼は友と急ぐものの如く、やがて行つてしまった。彼の信仰は如何であろう。そのみが心配である。何時か、話す機会がありがたいものである。12時、泰ちゃんを迎えに駅へ行く。水着に麦藁帽子という海岸の姿。本当によい気持である。汽車は延着した。やがて着いた。東京の苦熱にやられてゐる彼の顔は青白い。元気がない。荷物を持つて4人で帰つてきた。この自然と空気と水とに接して、彼は如何にも蘇生の思いといった顔をして嬉しがつていた。やがて元氣づいて来る。実に不思議といつてよい程この涼しき天地には効力がある。食欲不振の彼は今晚は、非常な食欲である。入浴した。電気が暫時消滅した。螢光は真の闇の中に、ちらちらと幻か夢の如く動く。今晚の虫は非



常なもので、室の障子の外でバタバタ。

…… [英文省略] ……

○1923年8月2日 (木)

晴。それから、キャッチボール。お午はお腹がすいたので美味しく戴けた。つい過食をしたのは悪かった。午後、散歩、午睡、池にて遊泳。3時、皆でお茶菓子を戴く。夜は、実に美事な綺麗な空。双眼鏡をとって、サソリ座をながめた。実にその美には魅せられざるを得なかった。スピカを双眼鏡内に入れたとき、ああ何たる天体の美ぞ。ダイヤモンドも彼の美には到底及ぶものではない。アンタレスの赤色炯々たる光は一種の物凄さをさえ有していた。空を仰ぎ瞻て、独り、溪流と合わせて讚美歌を高唱したとき、如何に僕の心は浄化されたことよ。天より流れ注ぐインスピレーションは如何に僕の心を慰め励まし歆ばしめしことよ。

Thou, O Christ, art all I want;
more than all in thee I find;

Raise the fallen, cheer the faint,
Heal the sick, and lead the blind

Just and holy is Thy name;
I am all unrighteousness,

False and full of sin I am;
Thou art full of truth and grace.

[編者訳]

キリストよ、あなたは私が望むすべてです。

私が見つけたあなたのすべてよりも

墮落した者をよみがえらせ、かすかな者を応援し、

病人をいやし、盲人を導きく。

あなたの名は聖なるものです。

私はすべて不義であり、

偽りであり、罪に満ちています。

あなたは真実と恵みに満ちています。

エス様よ。今日の本当の僕の声として父なる彼に奉る。

今日もまた、多くの多くの罪を敢てせし私を願わくは赦し給え。

助力を与え給いて、雄々しき浄き父の子とならしめ給え。

父様は私を助け給い、導き給うことを確く固く信する故に、

ただ、お父様の聖旨に従いてのみ歩まん。

願わくは毎日毎日、御声を聞かしめ給いて正しき道を歩ましめ給え。アーメン。

○1923年8月3日 (金)

晴。起床6時。午前8時、出発。追分の山屋へ遊びに行つた。政矣さんと二人で徒歩で沓掛駅から鉄道に直角に向こうへ、畠や田の中を道を分けて行く。緑、青の自然の生々たる色の中を清き大気を呼吸しながら愉快に歩いた。白聖城の如きグリーンホテルも画の如く見える。

話は、いつしか信仰上のことに移つた。足は機械的に気持よく運ばれた。或は森の側を、或は吊り橋の上を、或は小川のほとりを、或は断崖の傍を、谷を臨みつつ、或は野原の中を、ただ二人の影のみ移り行く。自然と我等、そして時々その自然の美を称えつつ。浄き国へ辿り行く心地して。聖書の話、経験の告白、基督教と現代等、また内村先生のこと等、話しのぼつて、尽くべくもなかった。

岩百合の白き大なる花は、かのイースターの時を想い出ださしむる懐かしき懐かしきものであつた。二人は何とも云い得ずしてその美と愛の花を見つめた。

天然の百合、谷間に咲く白百合は、これを彼等の生ずる故郷なる、かかる谷間に見て真の美を見得るのである。人の彼等を採らんことを懼れるのである。

政矣さんは教会に属して、教会日曜学校のために勤勉である。僕は彼の真面目なる信仰のために、彼と交わつて愉快である。彼もまた、自由なる偏せざる信仰を求めて歩む。生活、基督者の真正なる生活によつてのみ生くることを求むることに於て、僕と望みを一つにする。深く語り合つて、所謂、腹心の披瀝よりも更に奥底の告白をなして慰め、励ましたその散歩の感謝なりしことよ。

神は、我々をして語らしめ給うた。語る機会を、のぞまざるに与え給うた。而も明日、政矣さんは帰京される。その前日、図らざりき二人は語ることを得た。1時間半の散歩をした果てに、茂沢村は我々の眼界に顕われて来た。一昨年の思い出の村が来た。それから、小さな峠を経て、山屋に着いた。そこには山の懷で、溪流の落ち合う所である。ただ一軒昔の^{おもかげ}の^{おもかげ}の^{おもかげ}とどめて立てていた。エデンの花園かと見まがう楽園が、山間のこの寂しき地にあることは不思議と思わるるばかり。種々なる花が、文字通り咲き乱れていた。

大輪の百合、その純白の花が最も歎ばしかった。お爺さん、お嬢さんは相変わらず花が好きで、会わぬ前から懐かしかった。池も昔のまま、鯉もそこに育まれていた。突然、「ここにちは」と云つた二人の声に、娘さんは、且つは驚き且つは飲んで迎えた。お爺さんはアンマにかかつて一寸ねていた。お嬢さんは一寸出掛けた留守であつた。あまりの突然に、あまりの意外に、お爺さんも驚愕と悦^{えつ}怡に、言うに言われぬ声をしたが、やがて満面笑みを湛えて談笑しだした。

40分ほど経て、四郎ちゃん、泰ちゃんが汽車で来られた。二階で大の字になつて四人は



涼んだ。お昼は美味しく戴けた。昼後小憩後、側の川の淀んだところで泳いだ。清き水、泳ぎながら呑んでもよい様な水で、頗る気持がよかった。

4時半の汽車で帰宅した。よい散歩であった。お爺さん、お嬢さん、お娘さんは「親切」「愛情」そのものであった。帰宅、入浴。食後、休息。入浴。就寝9時半。ぐっすり。

○1923年8月4日 (土)

晴。午前、何するともなく過ぎ行く。午後、2時半の汽車で帰京された政矣さんを見送りに駅へ行き、軽井沢まで同乗して御別れをした。暑い東京へ厭わず帰る彼の勤勉を心の中で称賛した。泰ちゃんと軽井沢の町へ散歩と買物のために出掛けた。帽子(四郎ちゃんと泰ちゃんの)を買った。日記帳がそろそろ終りになるので、これと同様なを買おうと思ったが、かかるものはなく、已むを得ず、別なものを買って来た。“The New Life” by Reo.Andrew Murey の訳本を買った(叔母様に戴いたお金で)。“Like Christ” by Reo.Andrew Murey の姉妹書である。彼れも此れも霊の糧の最良なるもの一つたるを失わない。僕の親しき友である。最良の友である。

泰ちゃんよ、物事を鼻であしらう様なことを止められよ。その口調、口吻は君の品性を卑しくする。またそれが君の性となってしまう。面倒くさいことも、いさぎよく忍んでせられよ。君にこの一途ありて、雄々しくやるときに、君は真面目に雄々しく、はきはきと活発に物事をやることの如何に、善きことであり、己れの心も、はれて行く快きことであるかを知るであろう。僕は忍んで待つ。君にこの念の萌してくる時を。現在の君のやり方では、己れも或いは気がつかぬもしれぬが、愉快でなく、人も愉快的な感じを抱くことが出来ない。君に願うことはこれである。君の心が一小事にも真面目に濺そそがれ、君の動作がハキハキすること。ただこれだけである。それで君は全然、変わった人間になれる。僕はその時を待つ。今日、一緒に散歩して切にこの事を感じた。

それからもう一つ言う、基督教は、本を読み、バイブルを読んで、よさそうだからとか、真理らしいとか云うことによつて解るものでは毫もなく、そんなことから信仰に居ることは更に出来ず、こんな好奇心から基督教を研究したら、それこそ害のみありて益なく、己れに害あるのみならず人にも害を及ぼす。浅薄な基督教徒の多いのも理なりである。また、基督教と基督教者の世より誤解を蒙ること甚だしきも理である。現代の基督教及び基督教者を見て、古えの使徒、真正なる基督教者、殉教者等は泣くであろう。

ルーテルよ、守れ。クロムエルよ、守れ。兄よ、守れ。僕を。兄よ、語れ、孤独の僕と。内村先生が言われた、彼の「幕一枚」を隔てて兄上と語る。これが非常な、最大の、僕の親しみ。僕の慰み、僕の心強さでありますよ。

今夜も星を仰いで、讃美歌456である。



○1923年8月5日（日）

「¹⁵言い盡しがたき神の賜物につきて感謝す。」（コリント後9・15）〔英文〕

My diary begins only few months before I accepted Christianity.

〔私の日記は、私がキリスト教を受けたただ数ヶ月前から始まっている〕

と云う、内村先生の語は丁度、僕の日記に於ても然りである。

恵まれたる1923年よ、その泉の源はいずれぞ。

そは1921年にあり。

その泉は如何なるものなりし。そは血の泉なりき。清浄き血の泉なりき。Christian の “Holy Sacrifice” 〔聖なる犠牲〕。ああ、^{くぐつたる}首ののみ、感謝の祈祷のみ。

For my Mother. (quote some lines from “How I became a Christian”)

She was born to work, — rivere est labolare for her, — and for fifty years she dis work as any frail human being could work. Till now about twenty years she has lived a life of widowhood, brought up and educated five (six) children with her own hands, never proved false to her neighbor, never ran in debt, but paid all the debt back that had been remaind when she became a widow.

It is tears to say that she has lost, first a son (who was to be my nearest elder brother) in his sage of one, and next one draughts (my only younger sister) in her age of ten, and the last! — ah, it was her son, the most relying upon, our eldest, our Strength, our Leader.

These two years, — 1921, 1922 — it was Tears. Dark Clouds covered my Home. Clouds brought Rains and Winds. But “Behind the cloud is the sun still shining.” One Strong Beam flashed into my Home, into my heart. It was Blessing that I had never reserved.

And my Mothers labour comes at an end, it was our Lord's will. It is a great will, a great blessing.

Yes, her eyes closed by the Lord's will. Mother thanks now, and I thanks now also heartily.

All because of our Saving.

Ah! Gift is great! The New Life! Everlasting Life!

We shall meet by His foot, and forever!

浅間山を望みし。

“Daily strength for daily needs”を時至らば訳そうと思っていたのに、昨日、軽井沢で『日々』の力』として訳されてあるのを見て少なからず悲観した。



○1923年8月6日 (月)

晴。午前、少々の勉強。午後3時頃、西島の伯母様と、佐野のお嬢さん(静子)と横田広子さん(2年)の小さい二人が来られた。涼しいのでよろこんでいた。広子さんというのは非常に快活な元気な子である。名を忘れたが、佐野のお嬢さんもおとなしい。どつちかと云えばやはり快活な方の子で、子供らしくてよい。青山女学院の1年生である。

○1923年8月7日 (火)

午前晴、午後夕立、驟雨屢々。泰ちゃんが、ブヨだの、虻だの、蚤だのと云つて騒ぐ。蚤のために睡眠の十分にとれない晩が度々。蚤一匹に眠れないとはどうしたものか。あまりに神経質ではないか。ブヨにさされるとすぐ、アンモニアをつける。無闇にぬる。またよくふくれる。大分仰山に騒いでいる。皮膚が弱いのかも知れぬが、男はもつと無神経にならなくては駄目である。何だ、ブヨにさされる位と、云いたくなる。そんなに神経質だから眠られないのだ。もつとおおきくなりましたまえ。君はまたハキハキしない。自分から自分の氣持を腐らしている。故に不平なことが後から後からと起こつて、常に快活たるを得ない。言語の言い方が、如何にもだるそうであり、人の氣をも害する。自分で氣を引き立て、グングンやらなければ駄目である。氣力に乏しい。ごろごろしている。それを見て、はがいくる。腐つた青年と叱したくなる。それを見ている兄なる四郎君がそれを叱し励まさないのが不思議でたまらない。彼は末兒で、本当に我が儘と傲慢に育っている。自制と自覺がない。彼に対する所感と希望は未だあるが、これでやめる。

また、彼が「ケトー」と云う。西洋人のことを「ケトー」と云う。その語は何ぞ。僕はこんなことを平氣でしかも侮蔑口調で云う奴をなぐりたくなる。日本人は駄目だとまで云いたくなる。ケトーと云うときに汝の心は何であるか。おそろしい程、汚く劣れる心は汝のこの「ケトー」なる語を発するときではないか。汝の浅薄な性の全部はこの「ケトー」という一語に尽きる。

彼の将来が心配である。彼の友は薄つぺらな奴なのではないか。彼の諸兄の善導を祈る。而して考える。僕の責任の更に大なるを。僕は僕の言行によつて、僕の言行は即ち神の御導きによつて、そして、彼を動かさねばならぬ。動かしたい。しかし動かさんと努めない。彼のために自分の言行はなされるのではない。自分は自分の生命、生ける命のために動く。それが彼に及ぶか及ばぬかを問うのではない。

貴きこの身体、自分は絶倫兒であらねばならぬ。どうしても凡人では駄目である。偏人だか、変人だか、狂人だか知らぬが、とにかく凡人にてはあらざらんことを自ら望む。世と歩調を合わせることはどうも僕には出来ない。世と妥協なんか到底自分には出来ぬことである。僕の道は、世の道とちがう。世の道はその行く先が何だかしらぬ。至極、朦朧曖昧、然も落胆と絶望の調が見える。暗黒のみがのこる様である。しかし僕の道、神の道はこれと



全然異なる。しかし世の道の如き、快樂、愉快、安逸、成功は無い。そこには世の人の厭う、患難、苦痛がある。しかしこれは患難として終る患難ではない。常に神の栄光がそこに輝く。患難に感謝があり、祈祷があり、讚美がある。僕に力がそそがれた。これは実に歓ばしき、我れ、青年にとって、声である。

「²⁰彼らに言ひ給ふ『なんぢら信仰うすき故なり。まことに汝らに告ぐ、もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この山に「此處より彼處に移れ」と言ふとも移らん、かくて汝ら能はぬこと無かるべし』」(マタイ17・20)〔英文〕

……〔英文省略(エマーソン、カーライルの言)〕……

午後から、天、かきくもつて男性的な夕立がザーツと襲来して来た。何とも云えないよい心地である。夕方まで屢々、襲来した。天地は新しき気に湿つて、万物はその生々たる気に蘇生して復活の勢を得た。

午前、西島の伯母様と一緒に軽井沢へ行つた。帰りは別々であつた。散歩した。教文館の出張店と基督教聖書会社の出張店に立ち寄つて書を買つた。“Martin Luther's Table-Talk”、“Luther and the Reformation”、“サボラローナ”の3冊を買つた。“Letters of Wesley”は買いたかつたが、高価だつたのと、荷になるのとでやめた。

西洋人の運動好きなものには感心する。老人までが大人や子供と一緒にやっている。散歩をよくする。テニスが盛んである。運動を重んじ、飲食には節制あり、実に、コントロールのある生活をしている。飲食店あたりで見ても、暴飲暴食は決してしない。少量なものである。親子が年を別たず快活に遊ぶところは日本人にはない。実に平和であり、愛あり、自然である。日本人の大人は散歩も稀という風である。これでは西洋人と対立なんか到底出来ぬ。ケトーなんて言えば言うだけ、自分から自分を劣等へ劣等へと下げるものである。

Mens sana in corpore sano. 「健全な精神は健全な身体に宿る」は、欧米の実例によつて知る。リンカーンの体軀を見よ。彼の神聖なる労働と絶倫の精力を見よ、である。

○1923年8月8日(水)

晴。午前6時10分前起床、入浴。西島の伯母様と小諸へ行く。散歩に。非常に太陽が照りつけた。小諸城址へ行つた。ここから千曲川を俯瞰した眺めは非常によく、久しぶりでスケッチをした。『エソップ』(独逸語)の本の最後の頁に描いた。40分を要した。車中も蒸す様に暑かつた。この頃はよく運動も散歩もする。勉強は留守になつた。胃は未だ全快とは行かないが、節制と運動によつて時至れば全癒して僕の身体は御用に最も役立つものとなるものと信じ、徐ろにその時を待つのである。故に僕は愉快である、感謝である。夕食には、生まれて初めてというものを戴いた。それは、うどんにお汁粉をかけたものである。何とかいう名前があるが、聞いてすぐわすれてしまった。



日中、暑い盛りに、12、13の郵便集配人が大きな小包の一包と郵便鞆を荷つて、2、3里の道を歩く。自転車は通れぬ道、徒歩より仕方がない。顔は赤銅にやけている。腕は小さながらも鍛え上げた筋肉にキリツとしまっている。頑丈そのものである。彼は労働の子である。神聖なる労働の兒である。流汗淋漓りゅうかんりんりとは彼のその苦熱と闘つて働くときのことである。彼にお菓子と茶を勧める。すると純朴なる粗野なる自然なる彼は、「有難う」と云つて、一滴も一片も口にしない。ただ2、3分の休息をその縁側にとつて、再び炎天下に歩み出す。利も考えず、楽も考えず、ただ労働のために動く彼を賤いやしむものは誰であるか。彼の配達してくれる郵便をただ受けとつて、知らぬ顔の不埒者、怠惰者、悠遊の民は何人ぞ。彼に同情ねざらうものは幾人あるのだろうか。これで真の平和が社会に在り得るのだろうか。金によつて社会が組織されているところに平和、真の平和があるだろうか。今の社会は、かくの如きものではないのだろうか。せめて、「有難う」「ご苦労さま」位の言葉が出ないのだろうか。同情の言葉、親切な言葉のない消極的な冷淡な心は、東洋道徳から来たのではないかしらと思われる。総てが愛の心の不足からではないか。愛はその小さき端で、既に貴き大なるものである。大きい慈善のみが愛ではない。温情、*kind heart*、これが最も貴いものではないかしら。冷淡にして形式や法にはまつた人はおそろしいとまで云いたい。消極的よりも積極的に進んで善をなせ、愛をあらわせである。

○1923年8月9日 (木)

晴。午前6時20分前、起床。この頃、四郎ちゃん、胃の具合悪く、パンをたべている。午後1時頃から散歩に出掛けた。何処へいえば、千ヶ瀧の滝を瞻みにである。誰といえ、お爺さんである。お爺さん、僕に伴れられてホクホクである。当地へ来て初めて千ヶ瀧の方へ出掛ける。僕も滝は初めてである。道をよく知らないものが道をよく知らない者案内して行く。僕もお爺さんなまいきと行くのは光栄である。姿は見すばらしいが、その心は小兒の喜ぶが如く、同年の生生なまいきな友やなんかと行くよりも遙かに心が穏やかであり愉快である。千ヶ瀧の大道を彼と歩くときは、流石さすがに少々、見まりが悪かった。知っている奴に遭わずにすんだときは、正直、ホットした様であった。グラウンド、テニスコート、プール、マーケット、浴場(大理石の)を左、右に見て進む。観翠楼の所を左に折れて山路に入る。お爺さんは石や草や木に感心し、道草をなかなかくう。お爺さんの講釈を聞いていると、なかなか面白い。長年の経験があるから真理を吐く。平つたいことであるが、なかなか侮りがない所がある。

蔵尾山荘から1里余であろう。大分あつた様に感ぜられた。滝から流れ来る溪流を縫いながら近づくのである。実に清冽な水である。自然水の甘味は十分に味わわれた。足は切れそうで、1分と続けて居られなかった。ラジウムの湧出する源を見た。その井戸には蓋がしてあつた。



滝の大きさは真下、10間弱と思われた。人跡絶えたる谷間にお爺さんと二人で歩き、二人で語り、二人で休んだのは常に脱俗的であつた。帰途、入浴して来た。4時頃、帰宅した。一高の練習を見たが、バッティングが利くので気持がよい。東投手の如きは、ロング・ヒットのみと云つてよい位よくかつ飛ばす。グラウンド越のフライをカンカン飛ばすのには驚く。お爺さんは、石と松の芽生えを土産(東京への)袋に入れて、担いで来た。夜は今日も星づく夜であつた。広子ちゃんというのが元気で家の中は賑やかである。

○1923年8月10日 (金)

晴、夕立。起床6時。静子さんや広子さんの方が起きるのは早い。子供は早寝早起きである。熟睡する。朝から小鳥の如く賑やかで快活である。新鮮な野菜類が非常に美味しい。南瓜、生瓜、キャベツ、茄子、馬鈴薯、何でも美味しい。病後(腸カタル)殊に何でもござれ、である。今、食物で厭いなものといえば、ニンニク、ニラ、位なもので、その他のものは、肉であろうと、魚であろうと、野菜であろうと、貝類、海藻であろうと、何でもよしである。近頃、甘きもの、あん類の害を切に感じたから、この胃弱の中は、成るべくとらない様にした。あん類禁止、間食廃止(絶対とまでは行かぬが)をとつて、三度の食事を規則正しくとり運動を適度になすこと、これ最もよき健康法である。

「何を食わんと思ひ煩うこと勿れ」

の御言を遵つて有難く食事をすれば、神は争で僕の身体を救ひ給わざらんことあらんやである。これに絶対の信頼をなして、僕は安んじて日々の仕事をなすべきである。

4時頃、猛烈な夕立が襲来した。その雨の足が次第に近づくのを見得るのは山の特長であらう。風は一層涼となり実に快然たりである。東京にも雨、降れよかしと思われるが、その恐らく叶わざらんことは之、地形上如何とも仕方がない。

聴て霽れた。今夕はおそばを食べに行くことになっていた。田舎のそばは初めてである。殊にこの辺のは本場長野に近いから、わけて美味しいとのこと。くすぶつた様な室(休憩場と書いた道傍のお百姓の一室である)、そこには何の調度もない。ただ飯台一台である。おそば専門の家でない。ただ、そば粉があるから挽いてくれたに過ぎないのである。どんぶりに入れて持つて来た。そばの色を見て驚いた。随分黒い。それから、口に入れて見てまた驚いた。随分、ビロビロして固い。歯応えがある。これは挽きたてのほやほやだからだそうである。とにかく珍しいので美味しかった。純然たるそばである。一抹の混合物がない。帰途、夕立の再来に遭つた。帰宅後、一寸御飯を戴いた。折角こんな避暑地へ来て、相変わらずパンと卵と牛乳を食べている四郎君に同情する。

○1923年8月11日 (土)

晴。西島の爺さんが帰京した。お土産は石と松の芽生えである。お爺さん昨夜は非常な



機嫌で、一人芝居を盛んにやって、こっちが根気負けしてしまう。例の章魚踊り^{たこ}をやって見せた。その口つき、その眼、その手足、実に章魚そっくりで、喜劇役者には格好というところである。

お爺さんの習慣を見ているとこうである。晩6時半か7時頃、トックリを持って酒屋へ行く。そこで一杯やって来て、入浴する。それから、よい気持になって帰ってくる、自分の眼界に人が居れば、話そうが話すまいが、とにかく相手と見做して一人で喋舌りだす。脱俗的な口調で。それを聞いていると、のんびりして、頭はばかになるというか空になるというか、とにかくお爺さんにひきこまれてしまう。そして20、30分も喋ると、御飯を食べる。お爺さん歯がないから、必ずあついチンチンしたお茶をかけて、お茶漬けにして、2、3回もぐもぐさせて呑み込んでしまう。それで大体のものを食べて、消化するから不思議である。食事がすむと、やがて床をのべて、小児の如くぐっすり眠込んでしまう。それが9時以前である。朝は何時に起きるか知らないが、とにかく一定の時刻にちゃんと眼が覚めるとのことである。そして、お爺さんはNice Weather Prophet「天気預言者」で、お爺さんの言うことには大抵間違いはない。西島様は東京に於ては、お爺さんに天候を聞いて、傘の要、不要を定めてご出勤されるところである。彼はもと漁夫をやったことがあるから、雲行きによって見定めることが上手なのである。魚とりの話などを聞くと実に面白い。先月の14日に来て、今日帰るわけである。また今日、突然のお葉書で西島の御母様も帰京された。西島の伯父様が御病気の由である。

明日、僕達は追分へ。四郎ちゃん^{しろう}は東京へ帰るといっているので、晩は静子さんと広子さんとランプ（ばばぬき）をして愉快に過ごした。

就寝前、川のとりに立ち出でて、変わりなき星を仰いで讚美歌を唱い、主を呼び奉り、お祈りをする。どうか、僕のまわりの人々も主の僕^{しもべ}となりて、主による親しき友とならんとを願ひ奉るとき、涙である。淋しきこの身の願ひは何時聴さるることであろう。

○1923年8月12日（日）

午前9時50分、蕨尾山荘を辞し去った。20日間近く佐野様の御厄介になって、よき避暑をさせて戴いて、まだ居たいことは山々であったが、お暇しなければならなかった。佐野の伯母様は親切にして下さった。胃のお弱いのが少しでもよくなれることを祈り奉る。佐野様のは発作が起きなければ、健康体の人と同様であるが、やはりそれが気候のよい所でないとよくない様である。

胃腸の疾患は、後が長くて困るものである。僕も後がながい。この青年、有為なる青年、前途多望なる青年の身、今から胃弱では大変困る。故に僕は高等学校時代に胃弱を根から露^{さら}して癒してしまわねばならぬ。この胃と腸を治すものは何であろうか。それは薬でない。それは医者でない。それは食物でもない。それは自分の意志でもない。唯一つの抛り頼む

ものがある。我が神、我が父なる神である。我が神、父なる神は、わが母上を長年の胃腸病から救い給うた。母は健全たる胃腸の保持者となられた。

主の聖旨に絶対に信頼し、服従して僕は健全なる身体所有者となり得ること疑いなしである。そこに忍耐を要する。聖旨なるが故に忍耐することは容易である。その忍耐もまた、我が忍耐ではない。御力によりて得る忍耐である。我弱し、然れども御力は大なり強なり。故に御力をそのまま戴いて我は人よりも大に、強たるを得るのである。3年間の堅忍、節制、積極的精神は必ず、我が一生の土台を築き上げてくれる。

神は必ず僕を救い給う。これより確かなる事実が他にあるか。十字架を仰ぎ瞻て、誠に明瞭であり、おのずから頭を下げて感謝の祈禱を捧ぐるに至る。

心も身体も総てが神によりて始めて生くるのである。而して慕う所は天国である。

「心を堅うして雄々しかれ」

而して、

「エホバを俟ち望め」

アーメン。

一昨年来た追分の山屋へ再び来た。否、今年が3度目である。3年前にも来たことがある。二階(主屋)の中央の部屋を借りた。泰ちゃんと二人で。宿屋の人々は例の三人で家族の様に親しいから、何の遠慮もない。気軽である。早速、側の川で泳いだ。

四郎ちゃんは2時の汽車で帰京された。明日、佐野の奥様が二人の子供を伴って沓掛へ避暑に来られる。僕達のために今日までの時日をさいて下さったことは誠に感謝に堪えぬ。東京では、噫、お暑かったこととお察し致す。御夫婦に4人のお子様、一家全部というわけである。賑やかなことであろう。その中に遊びに行つて見よう。

宇都宮の兄が、姉の看病のために上京された由。勉強も傍らされるとのこと。何々お忙しい。隊の方では帰校払底で、随分お忙しいとのこと。どこへ行つても忙しい様である。それにも堪え得る身体が実に貴い。僕もやがてその身体に。

10年昔のランプ燈の下で今晚は書『新生命』を読む。電燈にすれば5燭位であろう。

米国第29回大統領ハーディングが、蟹肉中毒で頓死された。意外なる出来事である。自身最後の己れはどうだったろうか。

嬰兒の乳を慕うが如く、天国を慕いて行かれしことを。人の死は、人を真面目にする上に於て貴きものである。天に宝積まんと日々、忠実なるものの幸はこれによつてわかる。歡びて主の許に召されんためには、如何になやむとも何かあらんである。

毎晩毎晩、スコルピオが、南のみ空にきらきらと、懐かしき姿を横たえる。

おまえと友となつたのは、処はいずこ。同心町。

時はいつか。我が兄に、「彼」の愛の点火えし時。〔夜空の星座の插画あり〕



○1923年8月13日 (月)

晴。午前、泰ちゃんは軽井沢へ行く。僕は少々の読書をして、清流に泳ぐこと1時間。日はあつい。北の障子を外して、幾分かの風を通して、ひるねをする。その中に昼食が出た。また横になった。蹺音^{あし}に耳おどろかされて起き上がると、泰ちゃんが帰って来たのだ。コンビーフとパンの食糧品を携えて。直ちに一緒に泳ぎに行った。泳いだあとでキャッチボールをした。そして夕方5時頃また泳いだ。夕食後、彼は突然、カブレの腰に発生しているのに気がついた。それは去年、長者町でなやまされたと同様のカブレらしい。彼は明朝帰京することを言い出した。僕も賛成した。早い内がよいと思ったからである。彼は荷造りをした。宿屋の勘定も済ませた。トランプをした。二人が床に入ったのは9時であった。それから1時間ほど床の中で話をした。うとうとして来て寝た。彼は例の蚤のためにろくろく眠れなかった様である。蚤とり粉を紛々と香うほど播いたのだけれどもその効はなかった。

○1923年8月14日 (火)

晴、暑気甚だし。午前6時起床。川で顔を洗う。ラジウムの鉱泉のチョロチョロ流れている所へ行つて飲んだ。少し鹹味^{かん}〔塩からい味〕がある。飲み苦いと云う人もあるが、僕には何ともない。帰つて来て彼を起こすけれども、グズグズと如何にも眠そうである。僕は朝飯を済ませて、彼と一緒に駅まで行つた。半里の道である。荷物を持つて行つて上げた。些細なことであるが、彼がそれに対して礼の言を殆ど発しなかったことは、彼にとつて悲しむべきことであつた。他人であつたら気を悪くするにちがいない。発車するとき、見送りに対して「有難う」の一語の発しないのは、あまりのことではないかと思つた。そのときは彼に、何の考えもなかったことをよく知っている僕は、気を悪くしなかったが。やはり、有難みということを感じる心に欠けた人は冷たい様な感じがする。

これ権利なり、これ義務なり、これ当然のことなり、と冷たき理論、法則を以て第一となし、最もよしとする現代人よ。汝の身体は冷たくなり行く。汝の心は誇り行く。畢竟するに、汝は汝自身を以て最高最大となす。汝は更に大なる貴きものの上に在ますを悟りて、謙遜、感謝の道に入らざるべからず。

よい運動をして帰つて来た。間もなく泳ぎに行つた。帰つて来て、書翰を認めた。お昼は美味しかった。少々、過食の傾向であつた。1時頃、宿を出て10町余りの点にある茂沢の村へ行つた。小学校へテニスをやりに。小学教員が一人(唯一の先生)と村の若い男や女が7、8人、皆、午後1時頃から4時頃までここでテニスをするにしているそうである。一村の人々であるから、顔は皆熟知している様である。睦まじく遊ぶ様は田舎にあらではと思わせられた。午前は養蚕で忙しい。午後の3時間を利用してここに快をとるのである。僕も入れてもらった。その先生なる人は山屋の親戚である。他に一人、やはり親戚のもの



が居た。今日こそは文字通り炎天、やぐが如しであった。実に暑かった。しかし、テニスをしている間は愉快で暑さも忘れていた位である。本当に愉快に遊ばせてもらった。感謝措く能わずであった。小学校の子供等は妙な奴が来たと思って、皆、驚異の眼を見張っていた。少々これには閉口だった。10町余の山道を帰るのは相当辛かったが、愉快なりしその気が、疲れた身体を励まし、照る日にも屈せず潔く運んだ。

道は全然独りであった。独りこの避暑地にかかる生活をなしている辰雄を見ている人々があつた。それは親しき友、政美兄上であつた。道を歩きつつ天を仰いで双手を挙げて、

「大きい兄さん、僕はここに居ます。大きい兄さん、有難うございます」

と叫ぶのであつた。兄は生きて天に居らつしやる。時々、非常に僕の近くまで来られて語られる。その度に、兄上に感謝する。そして、兄上に励まされて、この世の旅路を歩む。日、一日と兄上に近づきあることを思うと、また言われぬ喜びがある。目指すところはみくのみである。僕の道は、上る道、栄光の道、主の道、みくにへの道。

寄宿後、泳いだ。実によく泳いだ。実によい気持だった。夕方、6時頃また泳いだ。水は清く暖かい。今日は二階、三間を通して一人でねる。犬が山から兎を捕えて来た。お嬢さんは犬に御褒美をやった。しかし、兎の死体は涙の種であつた。

○1923年8月15日(水)

晴。起床6時半、囲炉裏の側で朝のお茶を呑む。田舎の人の習慣らしい。漬け物か沢庵を出して食べる。お茶の代りに僕はラジウムの鉱泉を汲んで飲んだ。昨晚の犬の収穫物なる兎の御馳走というわけで、お爺さんと炉を囲んで、鍋を懸けて対座で兎鍋をした。不関る珍味に舌鼓を打った。柔らかい、あつさりした肉である。山兎は初めてである。犬までが僕を款待してくれたかと、動物に対する愛が坐ろに増すのであつた。しかし捕らわれた兎は何としても可愛そうである。ここに自分の不徹底を見た。食べているときは、美味しい一方に気を牽かれて、舌鼓を打ちながら、いざ考えて見ると可愛そうになる。そこで思った。犬、愛すべし。しかし更に愛すべきは我がために犠牲となつた兎である。

午後、今日もまたテニスをやりに行った。4時まで遊んでヘトヘトになった。渴^{かつ}えたところへ、カシオさんという人に山羊の乳を搾ってもらったときの味は格別であつた。山羊の乳は生まれて初めてである。生まれて初めてというものを今日は2品食べた。

降る様な星とは、今晚の様なのを云うのである。感謝の一日であつた。泳ぎと、テニスと、小さい自然と、愛する書と、易らざる親しき友、星と、これがこの頃の友である。人のほかに友はいくらでも居る。

「エホバは我が牧者なり、乏しきことあらず」

である。宿のお爺さん、お嬢さん、けさえさんとは一家の者の如くして自分は宿屋に宿泊している心地がしない。庭には種々の花、殊にダリアが咲き乱れている。楽園である。讀



美歌を独り唱って床に就いた。

○1923年8月16日 (木)

晴。午前、1時間ほどの勉強もしない。ぐずぐずしている中に10時になった。書翰を3通認めた。11時半からお昼まで泳いだ。くたびれて、ぐうぐう眠った。起きたのは5時であった。

身体を作らんがために授けられた避暑生活もそろそろ終りとなって来た。果たしてそれに応え得る生活を忠実に歩み来ったかと顧みるときに、残るは、いつもの嘆息である。弱き私のいつもの嘆息である。これで本当の基督者であろうか。神の最も厭い給う一人は確かに僕である。僕はもう筆を走らせる気さえない。

十字架ならで

たのむかげなき

わびしきわれを

あはれみたまへ

みすくひなくば

いくるすべなし アーメン。 [讃美歌260 「千歳の岩よ」]

Nothing in my hand I bring

Simply to Thy cross I cling

Naked, come to Thee for dress

Helpless, look to Thee for grace

Vile, I to the fountain fly

Wash me, savior, or I die! Amen. [Rock of Ages]

○1923年8月17日 (金)

晴。午前6時、起床。7時出発。7時54分追分駅発車、上り列車。沓掛着、徒歩で佐野様の別荘へ行く。皆様、喜んで迎えて下さる。西島のおじさんが御病氣御全快で、おば様が来て居られたのは(沓掛に)、誠に喜ばしきことであった。星野温泉へ入浴に行く。昼食を戴く。午後3時少し前の列車で軽井沢へ行く。駅前から沿道、大変な人である。僕もその人垣の一員として列なる。お待ち申すこと1時間、摂政宮様の御召列車が着駅。迎砲一発高く揚がる。御召自動車はやがて鉄道沿道を西へ走り出す。在郷軍人団から喇叭の音が^{りゅうりょう}囀^{りゅうりょう}と響きだす。脱帽、歓呼の聲が揚がる。非常な霧が立ち籠めている。殿下の御召自動車はしかし無蓋であった。よく拝し奉ることの出来たのは誠に堪えなかった。殿下は、背広に中折帽の御姿であった。何れも黒色で上品な質素な落ち着いた色である。外人の団に向かつては、彼等の歓迎に対して殊に歓びの色を見せられた。僕は初めて摂政宮殿下を



拝した。今日の記念に教文館店で“The Way of Life”という書を買った。時間が無いので随分急いだ。汽車の時間には間に合ったが、切符を売らぬと云う。仕方無しに沓掛まで徒歩。列車は満載。溢れんばかりの人である。

佐野様の所へ宿^とめて戴きに行く。小さい人々が食前の祈祷をするのは可愛い。誠に我等のとする食事は神様の貴き賜である。無造作に箸をとる人々が可哀そうである。入浴する。今日は流石に疲労して、ぐっすり眠る。静子さん、清子さん、広子さん、数子さん達と讃美歌を歌う。

○1923年8月18日 (土)

起床5時、5時半入浴。朝食3杯はこの頃のレコード。佐野の叔母様は御料理がお上手である。佐野御一家はお墓詣りに小諸へ行かる。西島の叔母様と二人だけ。お昼を戴き、昼寝をする。一週間も居ないと、この沓掛の別荘の涼しさの有難みが深く感ぜられる。池の水は随分冷たかったが広いので、飛び込んだ。ゾクツトするほどだが気持がよい。人が見て居なかったから思う通り泳げた。温泉へ入って、帰って来たら汽車の時間。大急ぎでお暇して帰る。停車場で上りの列車から降りた佐野様一同に遭う。山屋へ着いたのは3時半。また泳ぐ。疲れた。また入浴。9時消灯。兄上様から缶詰の小包を戴く。一人ではもてあます位である。

○1923年8月19日 (日)

晴。午前6時半起床。母上、兄上へ御手紙を差し上げる。水泳。午後、『新生命』を読む。我が最良の友である『基督の如く』を読む。之また最良の友である『ルーテルの生涯及び事実』を読む。夜は、讃美歌と聖書。二つ三つ新しい讃美歌を憶えて嬉しかった。

母上から御手紙を戴いた。僕の健康のために色々とお心配下さる熱き母上の愛に涙が零れる。母上は熱^{ねつ}間の東京に居られ、自分の熱き苦しみを忘れて僕の身体をのみ思い給う。僕は本当に母上を安心おさせ申す身体的所有者たらねばならない。僕の御用は沢山ある。総て父なる御神のお導きにより、我を棄てて主に総てを捧げまつて信仰に生きん。

この不節制と無思慮の罪、願わくは赦し給え。主の与え給う食にのみ感謝して生きさせ給え。自ら何を食わんと思ひ煩うこと勿らしめ給え。我が胃をして益々、強く、我が身体をして益々働く身体とならしめ給え。神よ、最大の願いは之でございます。アーメン。

神よこよひ よもすがら 小兒の如く

みふところに やすませて 安らかに 眠らしめ給へ。

てりがややく みすがたを みさせたまへ ゆめぢにも。



○1923年8月20日 (月)

晴。我が主よ、我取るべき道を知らず、願わくは、御力を与え給え。導き給え。

独り静かに主の命を俟ち望まん。

十字架を仰ぎ瞻てのみ、わが心は安かれ。

主よ、我が心は砕けんばかり、

母上に、兄上に、姉上に、如何に応えん。この罪の身を如何にせん。

ただ十字架にのみよりすがりて。

然り、忍ばん、忍ばん、主よ。

「¹⁸われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顯れんとする榮光にくらぶるに足らず。」(ロマ8・18)

「¹⁴エホバを俟望ぞめ雄々しかれ汝のこころを堅うせよ 必ずやエホバをまちのぞめ」(詩篇27・14)

Thanks, Thanks to thee, my good friend.

○1923年8月21日 (火)

晴、驟雨あり。起床6時。荷造りをした。例の如く囲炉裏の側で朝食をとる。お爺さんにレモンシロップをお見舞としてやった。腎臓、心臓、脚気に弱っているのであるから、どうも可愛そうである。気長に治す様になぐさめて来た。62の高齢だから、治りはおそいかも知れないが、元来丈夫であるから見込みは十分ある。今年中に全快の報せを聞きたいものである。ラジウムの水を汲みに行った。鉱泉は滾々こんこんとして湧いて居る。貴重なる水の一杯を飲んで来た。おばあさんは毎日、ラジウムの水をビール壺に2本呑むそうである。

やがて、時間が来た。お爺さんにもお嬢さんにもその他の人にも犬にも猫にも別れを告げて立ち去った。追分駅まで徒歩。浅間山の勇姿は昔の通り。沓掛下車。自動車で佐野さんの家へ荷物揃えに行く。追分より持参のと一塊となした。お昼は、叔母様の心尽くしの御馳走になった。美味しかった。沓掛最後の入浴をした。

2時40分の列車には自動車の都合悪しく乗り損なつた。やや癪だつたが仕方がなかった。広子という女の子が、もう一晚宿つていらつしゃいよと云ってくれたが、その叶わざるを如何せんであつた。子供の純な心と、大人の利害関係の心との対称の如何に、美と醜、愛と冷との差あるかを見て、つまらなき人の心のあわれさを感じさせられて、受ける僕よりもその人が可哀そうになるのであつた。

4時50分の列車で帰京の途に就いた。帰りの自動車から4人の子供のおそばを買いに行くのを見、やがて彼等と可愛らしき「サヨナラ」を交わして別れた。車中は混んで居て、暫く立つて居なければならなかった。碓氷峠を下りたときは、ムツとする様に暑く感ぜら



れた。雨が少々降り出したので、大いに有難かった。磯部でやっと席を得て腰掛けた。磯部煎餅のお土産を買った。「サボラローナ」を繙いて読んだ。

そのうちに隣席の人に話しかけられて、話は、それからそれへとうつって、とうとう上野まで話してしまった。雨のお蔭でそれほど暑くなかった。今は西瓜の出る時と見え、汽車の棚のあちこちに西瓜の大頭が藁の蒲団の上に鎮座している。実に見事なものである。10時、上野着。相変わらずガヤガヤ、ガチャガチャの東京である。沓掛の涼風を思い出すと、この上もなく懐かしくなる。

門の戸を叩いた。丁度、母上が縁側に居られて、返事をされた。僕の声に驚いて出て来られた。第一に握手をした。姉が元気で居られて嬉しかった。姉のお母様が居られた。就床、11時。床の中で母上と少しお話ししている中に眠くなってとろとろと夢路に入ってしまった。

